

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

論文題目 『近世後期萩毛利家の研究―天保改革期の軍制再建』 氏名 上田純子

本論文は、近世後期の萩毛利家を素材として、藩の軍制とその変容過程を検討し、併せて武士身分の解体に向けての動向をさぐる中で、幕末維新期の同藩における政治・軍事状況の歴史的前提を解明しようとするものである。

序章で研究史批判の中から課題設定がなされた後、本論を六つの章と二つの付論を二部に分けて構成している。まずⅠ部「近世後期の海防」では、はじめに1章で、寛政期から文化・文政期における対外的危機の発生に対して、萩毛利家がどのように対応したのかを検討する。そして、海防体制の構築という課題の中で、旧来の封建的軍事力のみでは対処しえず、郷土防衛的な沿海防禦体制の構築が模索され始める起点を見出す。次に2章では、文化7年以降の神器陣一鉄砲を中心にした新陣法一の導入による伝統的軍団編制の改編過程が検討され、これに対し家臣団から「持方」一家格や階級に応じた軍団内での位置一の論理に基づく反発が起きる状況に注目する。付論1では、文政以降、北浦筋や見島の海防政策を検証し、在郷住宅諸士や陪臣、百姓軍夫などの動員構想を明らかにする。

Ⅱ部「天保改革期の軍制再建」において、まず3章では、天保14年4月に実施される羽賀台大操練の準備過程を検討する。この大操練は、元和年間以来実質的に中絶していた藩の軍役動員体制を復活・再編させるための一大軍事演習であり、その前提として、桎梏となる家中の「持方」をどのように再編・解体しようとしたかを、軍団の備や動員規定の詳細な分析を通して明らかにする。続く4章は、羽賀台大操練自体の検討である。ここでは、天保末期の対外危機における海防を名義とし、14000人にも及ぶ動員を遂行しえた萩毛利家の軍役動員体制を、城下町や地下<sup>じげ</sup>における動向を含めて細かく解明してゆく。付論2は、門閥浦家を事例として、在郷住宅の諸士が大操練にどのように対応したのかを検討する。5章は、弘化2年、萩毛利家が幕府に提出した海防報告書の作成過程と、そこから派生した軍役動員、人馬・兵糧徴発の強化策策定への過程を辿り、旧来の武器が小銃へと転換される動向と、武器貸与のシステムを見、これが武装自弁を本位とする武士身分の存立を脅かすにいたる様相を検証する。最後の6章では、嘉永期における新たな軍事力編制へと向かう萩毛利家の模索を辿り、家中軍事力の軸を鉄砲へと転換する諸施策の本格化と、水陸撰鋒隊など武士の家を超えた新たな軍制を幕末期「諸隊」の萌芽として注目する。

本論文は、第一に、当該期萩毛利家の軍制について、軍団編制・軍役動員を中心に、18世紀末から嘉永期にかけて、その実態と変容過程を初めて詳細に解明した本格的実証研究として高く評価できる。また第二に、天保14年の羽賀台大操練の全過程を明らかにし、幕末期軍制や政治状況への転換点としてその政治史的な位置づけの確定を試みた点も重要な貢献である。さらに第三に、萩藩家中の身分階層（階級＝格と階層＝禄）の実態分析を精緻に進める中で、武士身分の変容・解体の動向を明らかにし、諸隊形成の歴史的前提を論じた点も特筆されよう。

本論文は全体の結論部分を欠いており、また幕末期の軍制問題については見通しを述べるにとどまるなど、まだいくつかの課題を残すが、上記のような顕著な成果に鑑みて、本審査委員会は本論文が博士（文学）に十分値するとの結論を得た。